



## 2018年度関東支部総会 特別講演会

公益財団法人日本卓球協会常務理事  
強化部長・強化本部長

### 宮崎 義仁 氏

#### Profile

みやざき よしひと 1959年生まれ、長崎県出身。中学から卓球を始め、高校、大学、実業団と、チームのエースとして活躍。卓球が初めてオリンピックの正式競技となった1988年ソウル大会に選手として出場し、日本の卓球界を牽引。現役引退後は、2001年にナショナルチーム監督に就任。小学生のナショナルチームを立ち上げ、一貫指導のシステムを構築。張本智和選手や平野美宇選手などトップ選手の育成に尽力し、日本卓球界の飛躍に貢献。

# 日本卓球協会の大改革 ～世界で勝てる選手をどう育てるか

## 短期間で世界トップクラス になった日本卓球

現在、日本の卓球界は若い世代の活躍で人気が高まっていますが、これだけ強くなったのは最近のこと。私がナショナルチームの監督になった2001年頃は、世界ランキング30位以内の選手は一人もいませんでしたが、今や30位以内はほとんど日本選手と中国選手が占めています。なぜ、日本が一気に世界の上位国になったのか、本日はその経緯を振り返ってみたいと思います。

私が監督に就任したきっかけは、2001年4月に大阪で開催された世界選手権で、日本男子が13位という過去最悪の成績に終わったこと。その夜、卓球界の同年代で集まって「このままではいけない」「大改革が必要だ」と話し合う中で、周囲から「宮崎、おまえが立ち上がってくれよ」と声をかけられました。

当時、私はある銀行で卓球部長兼監督を務めていましたが、仲間たちの言葉に突き動かされ、翌日には退職願を出しました。ほどなくして日本卓球協会の専務理事から監督

就任への打診があり、引き受けるに当たって、私は3つの条件を出しました。第一に、ホープスナショナルチーム、つまり小学校のナショナルチームを作ること。第二に、私に強化本部規定を改定する権限を与えてくれること。そして第三に、ナショナルトレーニングセンターを新設することでした。専務理事には、この条件をすべて認めていただき、私は晴れて男子監督に就任したのです。

## 小学校から育てた 若手選手を中心に

就任後、まず取り組んだのがホープスナショナルチームの設立でした。小学校には高体連や中体連のような全国組織がないので、まず「ホープス後援会」という組織を作りました。次に「小学生が出場を目標にするような大会が必要だ」と日本卓球協会に相談しましたが「そんな簡単にはできない」と断られたので、私個人で全国の小学校に手紙を出し、「第1回ホープス選抜大会」を開催したのです。ほぼ全都道府県から選手が集まってくれたおかげで、第2回からは協会が予算を取って

開催してくれるようになり、現在まで続く大会となっています。

次に取り組んだのが、ベテランから若手への切り替えです。2004年のアテネオリンピックが終わってからは、日本代表は中学生と高校生を主体にしました。その原動力となったのが、日本オリンピック委員会(JOC)のエリートアカデミー事業でした。これは、3つの条件に挙げていたナショナルトレーニングセンターを拠点に、将来のオリンピック選手を育てるもの。張本智和選手も平野美宇選手も、このアカデミーの出身です。

## 卓球漬けでなく、勉強と 両立できる選手を育てる

エリートアカデミーでは、小・中学生を卓球漬けにしていると思われがちですが、決してそうではありません。英会話講習やメディア対応講習、フェアプレー研修、お寺修行なども行っています。

こういう説明をすると「いつ練習をやっているのか？」と不思議がられます。実際、アカデミーでは練習と講習・研修の比率は半々くらいで、

## 組織のリーダーに必要な3つのこと

卓球を強化している学校の練習量と比べると3分の1程度。それでも結果を出せるのは、選手たちの集中力と勉強意欲、そして何ごとでもやり遂げようとする根性が素晴らしいからです。「人間力なくして競技力の向上なし」というのは、私が一番好きな言葉ですが、まさにこれに尽きると思っています。

よく「勉強と卓球を両立するのは理想だけど、強くなろうと思えば勉強している暇はない」と言われます。しかし、「理想」とは「現実性がない」という意味ではありません。理想を現実にしていくことが仕事だと、私は思っています。

## 日本卓球界の変革を次々と実施

日本卓球界の改革は、それだけでは終わりません。その後も、アンダー18からアンダー7まで、年齢ごとに選手を集めた強化システムをスタートさせることで、有望な若い選手が途切れることなく出てくるという形にしています。

一方、現在の主力選手については、海外遠征への派遣人数を大幅に拡大しました。ただ試合経験を積むだけでなく、ナショナルチームの行動規範として、禁酒、禁煙、茶髪やひげの禁止、5分前行動などを徹底させており、先ほどの各種研修も積み重なって、選手間に規律ある姿勢が浸透しています。

さらに、2018年には卓球のプロリーグ「Tリーグ」も始まりました。この構想は10年前からあったものですが、議論だけが続いていて、なかなか実現しませんでした。私が日本卓球協会の常務理事になった3年前から、一気に実現へと動き出しましたが、その原動力となったのは「卓球愛」です。人を動かしたり、反対する立場の人を説得するには、揺るぎない情熱が必要。私にとっては、それが「卓球愛」だったのです。

これら数々の事業は、決して私一人ではできません。コーチや事務局をはじめ、多くのスタッフに支えられています。私は彼らをリーダーとしてまとめているわけですが、その際に大切にしているのが、「心のスタミナ」と「心のパワー」、そして「心の柔軟性」です。

心のスタミナとは、周囲のスタッフに、いくらでも付き合えるということ。リーダーが疲れていたら、組織は動きません。ですから、私は今でもトレーニングを欠かしません。トレーニングというのは、ただ筋力を鍛えるだけではなく、心のスタミナも鍛えるもの。リーダーを務める人には、日頃から体を動かすことをお勧めします。

心のパワーというのは、すぐに動いて、一度に多くのことができる行動力です。例えば、この講演の間にも私のもとには数十本のメールが来ていると思いますが、控室に入ったらすぐに目を通し、必要な処理をします。そうしなければ、質問してきたスタッフが動けないからです。どれだけ疲れていても、やるべきことには即応できるという心のパワーが、リーダーには求められます。

最後に、心の柔軟性。これには、周囲の多様な動きに対応できる力と

か、常に新しいことを想像する力とか、いろんな意味がありますが、特に難しいのが、信念を持ちながらも時には妥協する柔軟性です。あまりにも妥協しないとスタッフや選手がつぶれてしまいますが、安易に妥協し過ぎると相手は成長しません。そのさじ加減は人によって異なるので、リーダーや指導者には、そこをいかに見極めるかが問われると思います。

## 卓球界にAIによる動作分析を導入

最後に、本日はFUJITSUファミリ会の講演ということで、卓球とAIについて紹介します。私も卓球協会では、AIを使った動作分析に取り組んでいます。卓球というのは、0.2秒で打った球が、0.2秒で返ってくる、非常にスピードの速いスポーツのため、一打ごとの球の行方や回転の方向などの分析は、とても人の手ではできません。そこで、AIを導入したわけですが、特に球の回転については、なかなか苦労しています。これができるようになれば、すべての球技に通じる動作分析システムができ上がると期待しています。

選手の強化と同時に、私たちはこうした技術面の努力もやっているということを紹介して、講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。

